丸森町文化財調査報告書第 22 集

# 台町遺跡・台町古墳群

－阿武隈川下流右岸金山地区河川改修事業に伴う発掘調査報告書－

2016 年 3 月

丸森町教育委員会

# 台町遺跡・台町古墳群

－阿武隈川下流右岸金山地区河川改修事業に伴う発掘調査報告書－

# 序　　文

丸森町には古くから人々が生活を営んだ形跡が残っており、町内で発見されている遺跡は164を数えます。これらの埋蔵文化財は郷土の歴史と文化を築いた先人たちの遺産であり、丸森町の歴史を学ぶ上での貴重な財産であると考えております。

台町古墳群は丸森地区と金山地区の境にある小高い丘陵上に位置し、全長33メートルの前方後円墳を中心とした多数の墳墓で構成される５～７世紀頃の群集墳として知られています。出土品には、瑟（はそう）を掲げる女性の埴輪像や玉類、鏡などがあり、学術的価値の高い遺跡として、宮城県の指定史跡となっています。

台町遺跡は、阿武隈川と雉子尾川が合流する地点の西側の沖積低地上に位置し、縄文・弥生時代の遺跡であることが周知されており、縄文土器・弥生土器が出土していました。台町遺跡については平成13年、平成14年に道路改良に伴う確認調査が行われており、その際に土坑などの遺構や土師器片、近世陶磁器などの遺物が出土しています。

今回調査を行った地域は阿武隈川下流で唯一の堤防未整備区間で、近年も度々浸水の被害が出ていることから、早急な堤防整備が必要と判断され、築堤工事が実施されることとなりました。工事範囲には台町遺跡･台町古墳群の遺跡範囲が含まれており、範囲内に遺構･遺物があるか確認が必要であったため、確認調査を実施することとなりました。

確認調査は、築堤工事が行われる区域内を丸森町が主体となって、宮城県教育庁文化財保護課の協力を得て平成27年７月より実施しました。

調査では、竪穴住居とみられる遺構や溝状遺構などの複数の遺構、土師器、近世陶磁器など複数の時代の遺物が出土しています。

発掘調査にあたり、地元の方々・関係機関の方々より多大なるご協力をいただきました。また、作業員の方々には、長雨による悪条件の中、根気よく作業に従事していただき、無事調査を終えることができました。

最後になりましたが、ご協力をいただきました皆様に対し心から感謝を申し上げます。

平成28年３月

丸森町教育委員会

教育長　佐藤　隆夫

# 目　次

序　　文　　丸森町教育委員会教育長　佐藤隆夫

例　　言

調査要項

目　　次

第１章　遺跡の位置と地理的環境 …… 1

第２章　周辺の遺跡と歴史的環境 …… 1

第３章　調査に至る経緯と経過 …… 2

第４章　基本層序 …… 6

第５章　検出遺構と出土遺物 …… 7

第６章　まとめ …… 14

引用・参考文献

写真図版

報告書抄録

# 例　　言

１．本書は国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所が行う阿武隈川下流右岸金山地区河川改修事業に伴い、平成 27 年度に文化財関係国庫補助事業の補助金を受け実施した台町遺跡・台町古墳群の確認調査報告書である。

２．調査は丸森町教育委員会が主体となり、丸森町教育委員会生涯学習課が担当し、宮城県教育庁文化財保護課の協力を受けた。

３．土色の記述には、小山・竹原編（1991）「新版標準土色帳」を使用した。

４．本書に掲載した遺跡分布図は、国土地理院発行「丸森」・「角田」（縮尺 1/25000）の地形図を複製して使用した。

５．使用した座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第Ｘ系による。図中の北は第Ｘ系座標の北と一致する。

６．執筆は丸森町教育委員会と宮城県教育庁文化財保護課で協議し、第１章から第３章は荒井優作、第４章から第６章は黒田智章が担当した。

７．発掘調査及び整理・報告書作成に当たっては、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所からご協力を頂いた。

８．発掘調査の出土遺物・図面・写真は丸森町教育委員会が管理・保管している。

# 調 査 要 項

遺 跡 名　　台町遺跡（遺跡番号 10102）・台町古墳群（遺跡番号 10050）

所 在 地　　宮城県伊具郡丸森町字二本木・字平
　　丸森町金山字下片山・字台町・字日野川原

調査原因　　阿武隈川下流右岸金山地区河川改修事業

調査主体　　丸森町教育委員会

調査担当　　丸森町教育委員会生涯学習課

調 査 員　　宮城県教育庁文化財保護課　生田和宏　熊谷宏規　黒田智章
　　丸森町教育委員会生涯学習課　荒井優作

調査補助員　〔発掘調査〕　天野剛弘　齋藤健治　齋藤眞理子

調査期間　　〔発掘調査〕　平成 27 年７月 21 日～平成 27 年９月 30 日
　　〔整理作業〕　平成 27 年 10 月１日～平成 28 年２月 29 日

調査面積　　2,669.1 ㎡　（調査対象面積 31,400 ㎡）

# 第１章　遺跡の位置と地理的環境

台町遺跡・台町古墳群は、宮城県伊具郡丸森町の丸森地区・金山地区の境界に位置し丸森町字二本木、丸森町字平、金山字下片山、金山字台町、金山字日野川原地内に遺跡範囲が広がっている。

丸森町は仙台市から南に約 45 ｋｍに位置する宮城県最南端の町で、東に亘理郡山元町・福島県相馬郡新地町、西に白石市・福島県伊達市、南に福島県相馬市、北に角田市と境を接している。また、阿武隈急行線と国道 349 号線が町の北部から西部に、国道 113 号線が北部から南東部に走っている。

茨城県北部から延びる阿武隈山地は、1,000 ｍクラスの山を形成しながら福島県を縦断し、丸森町に入ると次第に標高が低くなり、幅も狭まってくる。そして、２股に分かれて標高 200 ｍ～ 400 ｍ前後の高地となる。丸森町はこの阿武隈山地の北東部に位置し､加えて東西支脈の分岐点にあたるため、周囲を山に囲まれた盆地状になっており、全町の約 70％は山林となっている。町の北東部は伊具盆地から続く平野部となっており、丸森・金山・小斎・舘矢間地区では水田も多い。また、町の西部から北東部にかけては阿武隈川が流れており、その支流の１つとして雉子尾川が大内地区・金山地区を経て合流している。

両遺跡はこの阿武隈川と雉子尾川が合流する地点の西側に広がり、台町遺跡は合流点から約 700 ｍの地点の標高 16 ～ 22 ｍの沖積低地上に、台町古墳群は合流点から約１ｋｍの地点の標高 25 ～ 40 ｍのなだらかな丘陵上に位置している。

第１図　丸森町の位置

第２図　遺跡の位置

# 第２章　周辺の遺跡と歴史的環境

今回調査を行った遺跡の周辺には縄文から近世までの遺跡が分布している。（第３図）

調査を行った地域は台町遺跡・台町古墳群・台町館跡の３つの異なる時代の遺跡が近接して所在し

ており、台町遺跡は縄文土器・弥生土器が出土している遺物散布地、台町古墳群は５世紀～７世紀の古墳群、台町館跡は土塁・空堀の残る中世の館跡として知られている。

このうち台町古墳群は主軸長33ｍの前方後円墳と径５～25ｍの円墳174基からなる古墳群である。志間泰治氏による継続的な調査（志間1954ほか）により、礫郭、箱式石棺、竪穴式石室、横穴式石室など多様な主体部構造が確認されている。また、瑟（はそう）を掲げる女性の埴輪の他、六鈴鏡や鈴釧、直刀などの遺物も出土している。このほか、宮城県教育委員会による阿武隈川築堤工事に伴う発掘調査（宮城県教育委員会1991）や、東北大学による測量調査（藤沢2006）が行われている。

調査を行った周辺の遺跡について以下に述べる。

縄文時代の遺跡には、泉遺跡、松崎遺跡、日照田遺跡があり、泉遺跡では縄文時代中期の大木10式・晩期の大洞Ｃ式、日照田遺跡では中期の大木８式の土器が採集されている。

弥生時代の遺跡は、台町遺跡、寺内作田遺跡で石包丁、河原囲遺跡で磨製石剣が採集されている。

古墳時代になると遺跡数が増加し、今回調査を行った台町古墳群のほか、上片山古墳群、小富士山南古墳群、新町古墳群など周辺でも古墳が築造されるほか、矢ノ目遺跡のような集落も形成される。矢ノ目遺跡は昭和34･35年に、古墳時代中期の南小泉式･後期の栗囲式の土師器、石製模造品が出土し、10棟以上の竪穴住居跡が確認されている（志間1964）。

奈良・平安時代の遺跡には、原町遺跡、船渡道遺跡、袋遺跡などがあり、土師器や須恵器が採集されている。

中世から近世に入ると台町館跡のほか、丸山館跡、矢ノ目館跡、金山城跡のような城館が分布するようになる。また、丸山館跡の北側にある大古町遺跡では平成８～９年度に桜づつみ工事に伴う調査（丸森町教育委員会1999）、平成13～15年度に国道113号線バイパス改良工事に伴う発掘調査（丸森町教育委員会2003・2004）が行われている。調査では掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡などの遺構が確認されているほか、８～９年度調査では、12世紀後半から13世紀前半の輸入陶磁器、常滑産の甕などの遠隔地で生産された遺物、13～15年度調査では伊達家の家紋である三引両紋が描かれた片口漆椀や「法度」と書かれた高札と見られる遺物が発見されており、近世の伊達稙宗以前にもこの地に有力な権力者が存在したことが推察されている。

# 第３章　調査に至る経緯と経過

平成26年４月に国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所から、宮城県伊具郡丸森町金山地区の阿武隈川・雉子尾川の合流地点の西側における阿武隈川下流右岸金山地区河川改修事業計画が示された。工事の総延長は約1,070ｍ、総面積31,400㎡に及ぶ。

計画地内には台町遺跡・台町古墳群が含まれ、遺跡範囲を含む広い区域で築堤工事が計画されていることから、関係機関で協議を重ねた。遺跡に及ぼす影響が甚大であることが予想されたことから、確認調査を実施し再協議を行うこととした。

| 番号 | 遺跡名 | 立地 | 種別 | 時代 | 番号 | 遺跡名 | 立地 | 種別 | 時代 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 台町遺跡 | 沖積平野 | 散布地 | 縄文・弥生 | 14 | 越田B遺跡 | 自然堤防 | 散布地 | 古墳～奈良 |
| 2 | 台町古墳群 | 丘陵 | 古墳・散布地 | 縄文・弥生・古墳中・後 | 15 | 泉遺跡 | 谷底平野 | 集落 | 縄文中・晩 |
| 3 | 台町舘跡 | 沖積平野 | 城館 | 中世 | 16 | 矢ノ目遺跡 | 沖積平野 | 集落 | 古墳～中世 |
| 4 | 原町遺跡 | 沖積平野 | 散布地 | 古代 | 17 | 矢ノ目舘跡 | 自然堤防 | 城館 | 中世 |
| 5 | 船渡道遺跡 | 沖積平野 | 条里 | 古代 | 18 | 前並遺跡 | 沖積平野 | 散布地 | 古墳中・後・奈良 |
| 6 | 袋遺跡 | 自然堤防 | 散布地 | 奈良・平安 | 19 | 中原遺跡 | 沖積平野 | 散布地 | 古墳中 |
| 7 | 上片山古墳群 | 丘陵 | 古墳 | 古墳中・後 | 20 | 松崎遺跡 | 丘陵麓 | 散布地 | 縄文中 |
| 8 | 小富士山南古墳群 | 丘陵 | 古墳 | 古墳中・後 | 21 | 日照田遺跡 | 丘陵頂 | 散布地 | 縄文中 |
| 9 | 寺内作田遺跡 | 丘陵斜面 | 散布地 | 弥生 | 22 | 金山城跡 | 丘陵 | 城館 | 中世 |
| 10 | 大古町遺跡 | 沖積平野 | 屋敷・散布地 | 古代・中世 | 23 | 下田辺横穴墓群 | 丘陵斜面 | 横穴墓 | 古墳後 |
| 11 | 丸山館跡 | 丘陵 | 城館・散布地 | 縄文・中世・近世 | 24 | 長泉寺境内経塚 | 丘陵斜面 | 経塚 | 近世 |
| 12 | 新町古墳群 | 丘陵 | 古墳 | 古墳中・後 | 25 | 河原囲遺跡 | 丘陵麓 | 散布地 | 弥生 |
| 13 | 越田遺跡 | 自然堤防 | 散布地 | 古墳・奈良 | 26 | 塚田古墳群 | 谷底平野 | 古墳 | 古墳後 |

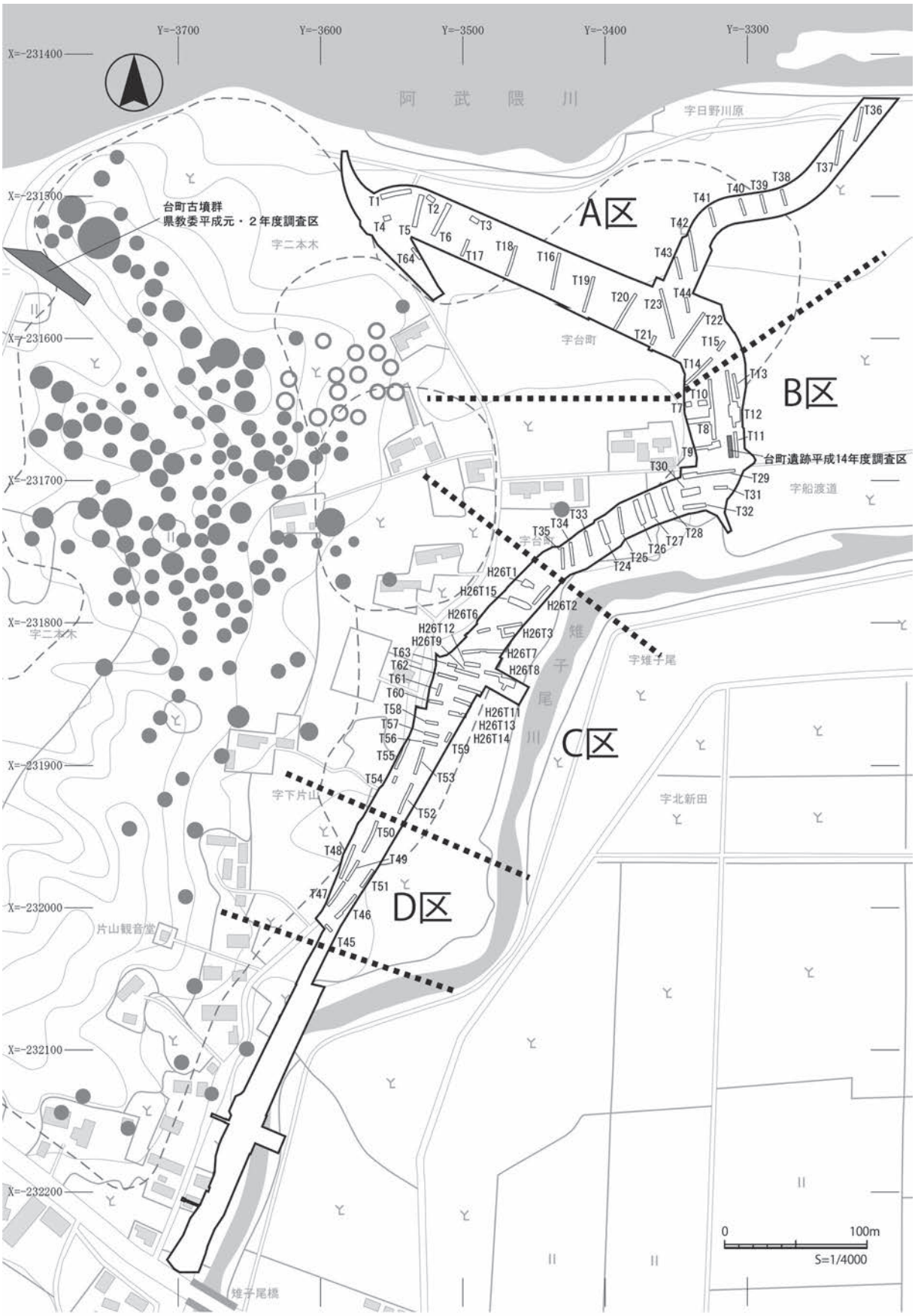
第３図　周辺の遺跡

調査は平成 27 年７月 21 日～９月 30 日の期間で行い、調査面積は約 2,670 ㎡である。なお、平成 26 年度（平成 27 年２月 16 日～ 24 日）に一部区域で調査を行っており、調査面積は約 538 ㎡である。

調査区域は北側からＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ区と大別して呼称することとし、調査区は調査区域には関係なく設定した順に１トレンチ、２トレンチ‥と呼称していくこととした。平成 26 年度調査トレンチには、「Ｈ 26」を組み合わせて呼称することとした。

遺構確認面までの掘削は重機を使用して行った。検出した遺構は、電子平板を使用して平面図をＳ＝ 1/1000、断面図をＳ＝ 1/20 で作成した。記録写真はデジタルカメラを使用している。

層序は標高が低いところは深く、高いところは浅い傾向にある。平成 27 年９月 30 日、埋め戻しを行い、調査を終了した。


Y=-3700
Y=-3600
Y=-3500
Y=-3400
Y=-3300
X=-231400
X=-231500
X=-231600
X=-231700
X=-231800
X=-231900
X=-232000
X=-232100
X=-232200
阿武隈川
字日野川原
台町古墳群
県教委平成元・２年度調査区
字二本木
字台町
A区
B区
C区
D区
台町遺跡平成14年度調査区
字船渡道
字雉子尾
字北新田
字下片山
片山観音堂
雉子尾橋
雉子尾川
0
100m
S=1/4000

第４図　調査区配置図

# 第４章　基本層序

調査区は標高 16 ～ 22 ｍの沖積低地に立地する。今回の調査ではⅧ・Ⅻ・ⅩⅢ層の上面で遺構を確認した。Ⅱ～Ⅶ・Ⅹ・Ⅺ層は阿武隈川の氾濫に起源するとみられる自然堆積層、Ⅸ層は沼地等に由来するとみられる腐植土、Ⅻ・ⅩⅢ層は地山層である。

Ⅰ層　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト質粘土。現代の耕作土。層厚は 5 ～ 40cm。

Ⅱ層　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質粘土。径 5 ～ 20mm の明黄褐色(10YR7/4)粘土ブロックを含む。砂粒を縞状に含む場合もある。層厚は 15 ～ 120cm。

Ⅲ層　褐色（10YR4/4）シルト。層厚は 10 ～ 60cm。

Ⅳ層　にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質シルト。Ⅴ層との漸移層。細砂を多く含む。層厚は 20 ～ 85cm。

Ⅴ層　にぶい黄橙色（10YR6/4）細粒砂。層厚は 5 ～ 20cm。

Ⅵ層　にぶい黄橙色（10YR6/4）中粒砂。層厚は 20cm。

Ⅶ層　にぶい黄橙色（10YR6/4）細粒砂。

Ⅷ層　褐色（10YR4/4）シルト質粘土。層厚 10 ～ 70cm。Ｂ・Ｃ区の遺構確認面。

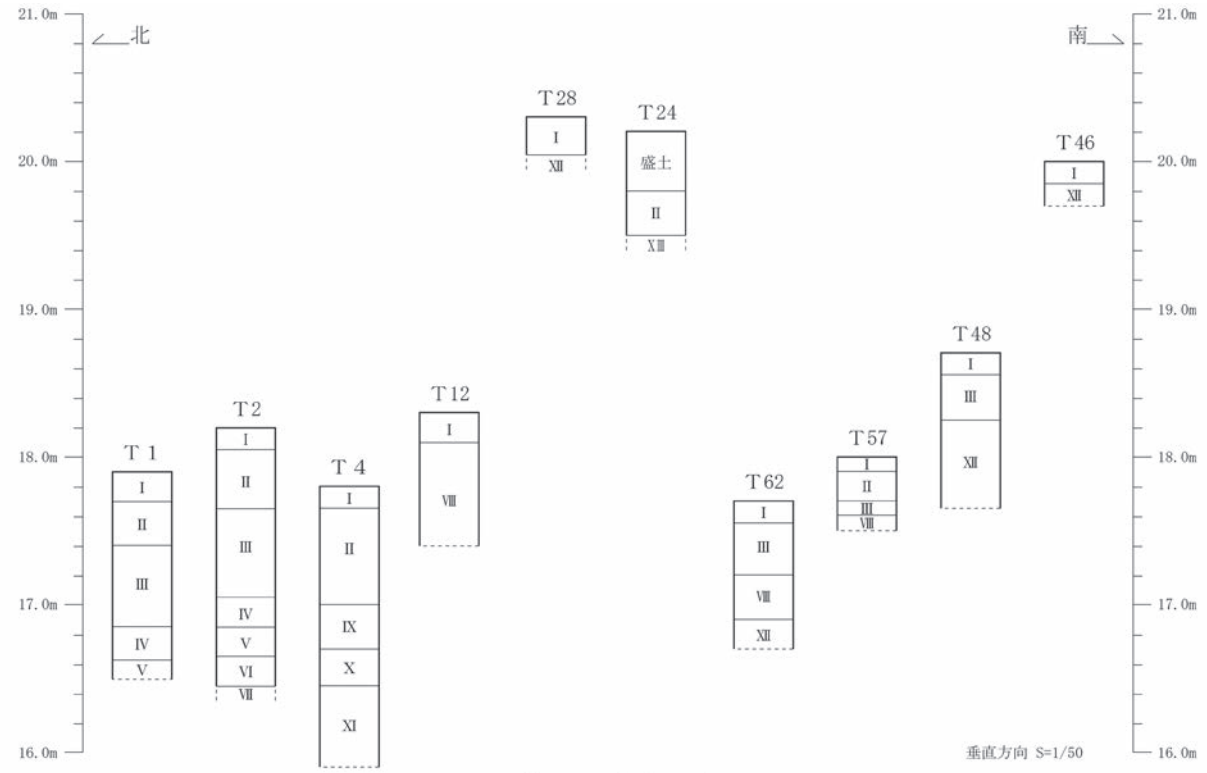
Ⅸ層　オリーブ灰色（2.5GY6/1）シルト質粘土。植物遺体を多く含む。全体グライ化。層厚は 30cm。

Ⅹ層　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質シルト。層厚は 20 ～ 25cm。

Ⅺ層　黄褐色（10YR5/6）細粒砂。大部分グライ化。層厚は 55cm 以上。

Ⅻ層　にぶい黄褐色（10YR5/4）粘土。層厚は 20cm 以上。Ｂ・Ｃ・Ｄ区の遺構確認面。

ⅩⅢ層　にぶい黄褐色（10YR5/4）粘土。径 30 ～ 50mm の礫を多く含む。Ｂ区の遺構確認面。




第５図　基本層序

# 第５章　検出遺構と出土遺物

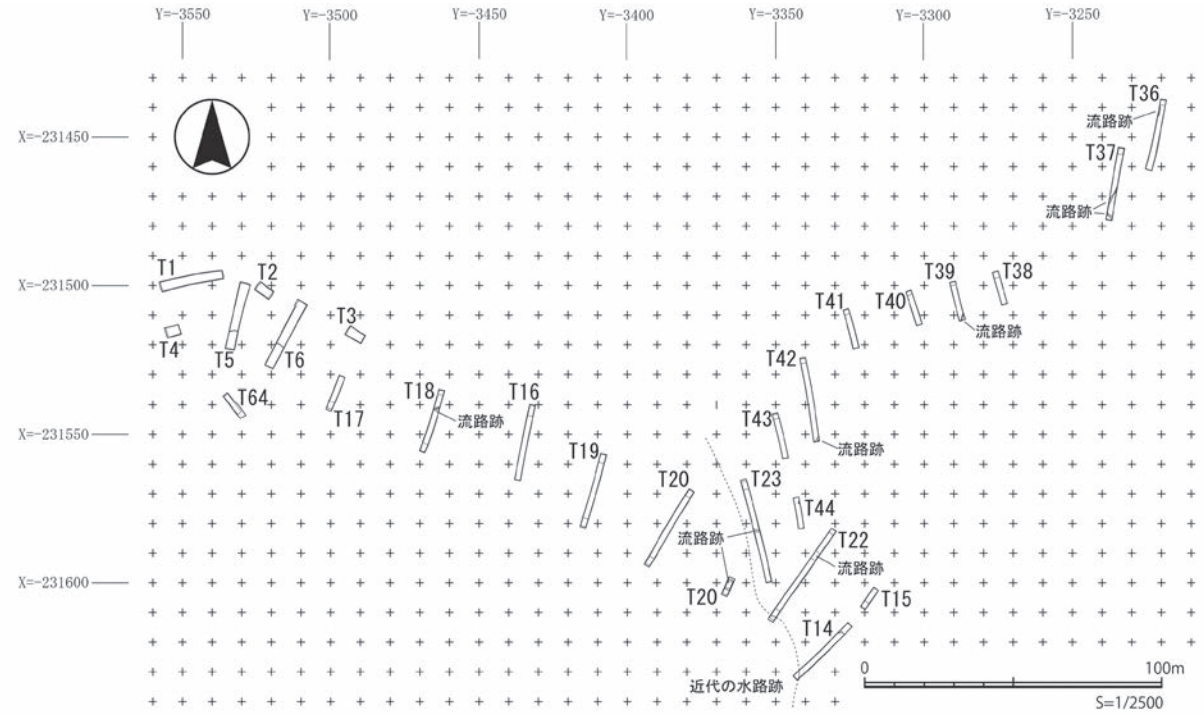
確認調査は 64 箇所の調査区を設定して実施し、24 箇所の調査区で遺構を検出した。検出した遺構には、竪穴状遺構１基、溝跡 24 条、柱穴列１条、土坑９基、小溝状遺構群２群、ピット多数などがある。出土遺物には、土師器、須恵器、陶磁器、鉄製品などがある。

調査区は対象地北からＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ区に大別した。Ａ区は阿武隈川に近い沖積低地に立地しており、標高は 17 ～ 18 ｍである。Ｂ区は西側の丘陵から派生する微高地で、隣接するＡ・Ｃ区よりも一段高く、標高は 18 ～ 20 ｍである。Ｃ区は丘陵裾部と雉子尾川に挟まれ、西側から複数の沢跡が入り込む低湿な土地で、標高は 17 ～ 18 ｍである。Ｄ区は南西に向かって上る緩い傾斜を有しており、標高は 19 ～ 20 ｍである。

以下、主要な遺構について個別に詳述する。

Ａ区（第６図）

T1 ～ 6、14 ～ 23、36 ～ 44、64 の計 25 箇所の調査区を設定した。遺構は検出していない。遺物は T3 及び T14 で土師器の破片が出土しているが、細片で器形や時代を特定できるようなものではない。T21・23・37・39 などで細い流路の跡を確認した。




第６図　Ａ区全体図

Ｂ区（第７図）

T7 ～ 13、24 ～ 35 の計 19 箇所の調査区を設定した。竪穴状遺構１基、溝跡６条、土坑４基、小溝状遺構１群、ピット等を検出した。また、Ｂ区東部の T8・T9・T29 ～ 31 で、近代に築造された水路跡を確認した。

【SI1 竪穴状遺構】

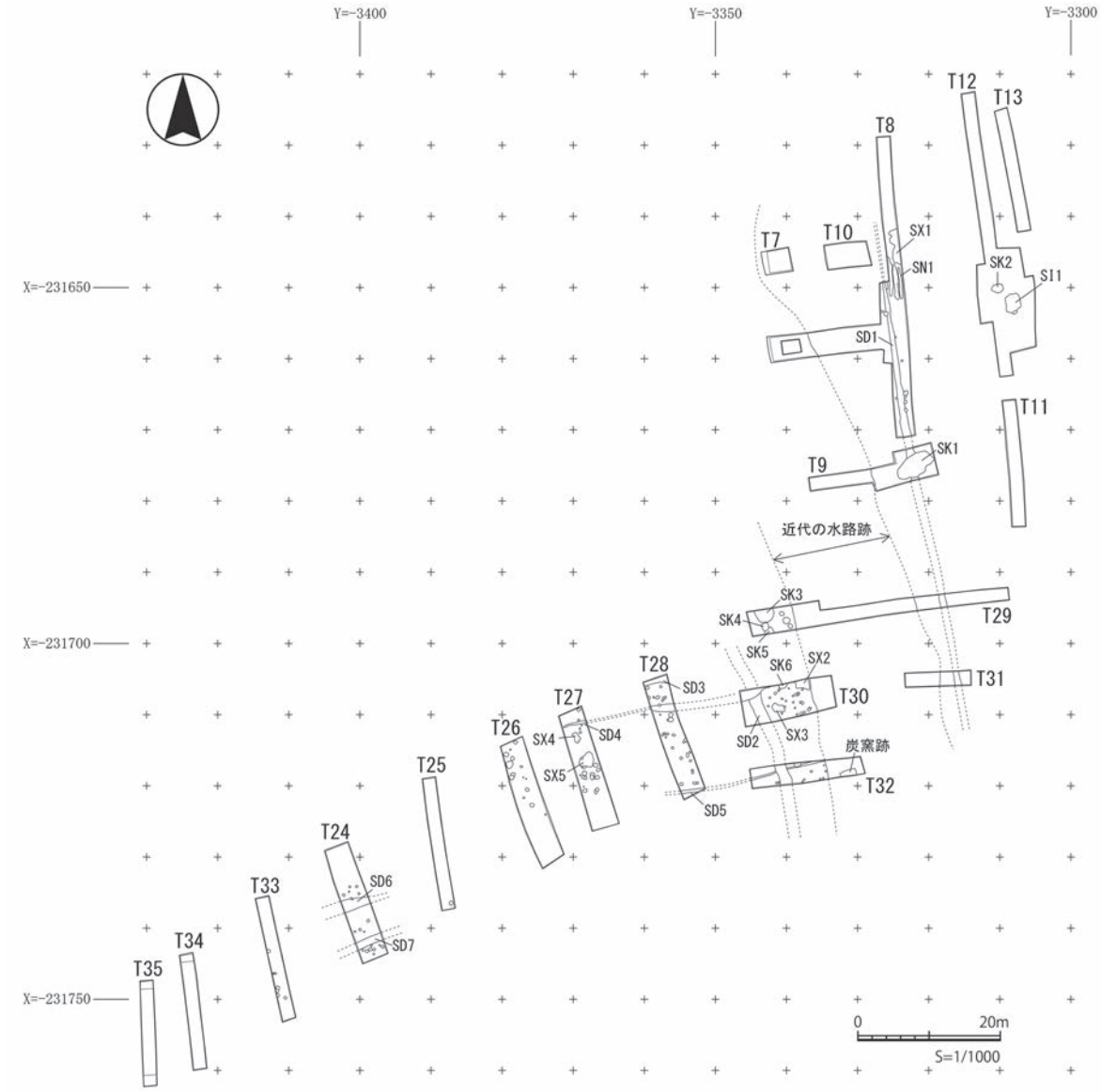
T12 の南側で検出した。長軸 2.4 m、短軸 2.0 mの不整長方形である。重複するピットより古い。方向は東辺でみるとN－ 14°－Wである。遺構確認面で北西部分を中心に焼土が広がっている。遺物は遺構確認面で土師器片 27 点、須恵器片 3 点が出土している。このうち、器形等が分かる資料としては、土師器の坏および高坏脚部とその同一個体と思われる坏部がある。破片資料のため、年代については古墳時代後期という推定に留めたい。

【SD1 溝跡】

T8・T9・T29・T31 で検出した南北方向の溝である。確認総長 57.5 m以上、幅 0.3 ～ 1.1 m。重複する T9 の SK1 より古く、T8 の SN1 より新しい。方向はN－ 9°－Wである。

【SD2 溝跡】

T30・32 で検出した南北方向の溝である。確認総長 12.9 m以上、幅 1.5 ～ 1.8 m。重複する SD4 より古く、SD5 より新しい。方向はN－ 20°－Wである。




第７図　Ｂ区全体図

【SD3 溝跡】

T28 で検出した東西方向の溝である。確認総長 3.4 m以上、幅は 1.1 m以上。

【SD4 溝跡】

T27･28･30 で検出した東西方向の溝である。重複する SD2 より新しい。確認総長 29.7 m以上､幅 0.3 ～ 1.4 mで、T30 北西部でやや北に屈曲する。

【SD5 溝跡】

T28･32 で検出した東西方向の溝で､重複する SD2 より古い。確認総長 20.7 m以上､幅 0.2 ～ 0.4 m。

【SD6 溝跡】

T24 で検出した東西方向の溝である。確認総長 3.7 m以上、幅 1.0 ～ 1.7 m。

【SD7 溝跡】

T24 で検出した東西方向の溝である。SD6 の南側に位置する。確認総長 3.6 m以上､幅 1.0 ～ 1.1 m。

【SK1 土坑】

T9 で検出した平面形が不整楕円形の土坑である。重複する SD1 より新しい。長軸 5.5 m、短軸 2.8 mである。確認面を中心に、陶磁器の破片がまとまって出土した。碗・小碗・皿・小皿などがある。19 世紀代を中心とした資料である。

【SN1 小溝状遺構群（畑跡）】

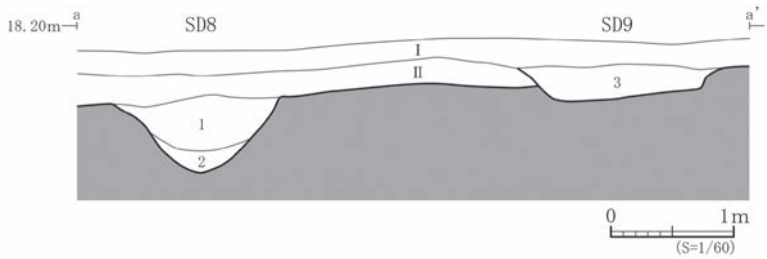
T8 で検出した南北方向にほぼ並行して延びる小溝状遺構群である。重複する SD1 より古い。溝は 0.1 ～ 0.3 m間隔で５条確認した。各溝の上幅は 0.2 ～ 0.6 mである。方向はおよそＮ－ 3°－Ｗである。

Ｃ区（第９図）

T52 ～ 63 および H26T1 ～ 15 の計 27 箇所の調査区を設定した。溝７条、土坑２基、ピット等を検出した。

【SD8 溝跡】

T56 ～ 58・62 で検出した南北方向の溝である。確認総長 50.0 m以上、幅 1.3 ～ 1.4 m、方向はＮ－ 19°－Ｅである。T57 で一部裁ち割り調査を行い、断面はＶ字状を呈し、深さは 0.6 mであることを確認した（第８図）。基本層Ⅷ層上面から掘り込まれている。堆積土は２層に細分され１層は暗褐色シルト、２層は黒褐色粘土質シルトで、いずれも自然堆積土と考えられる。遺物は堆積土中から土師器の細片が４点出土している。

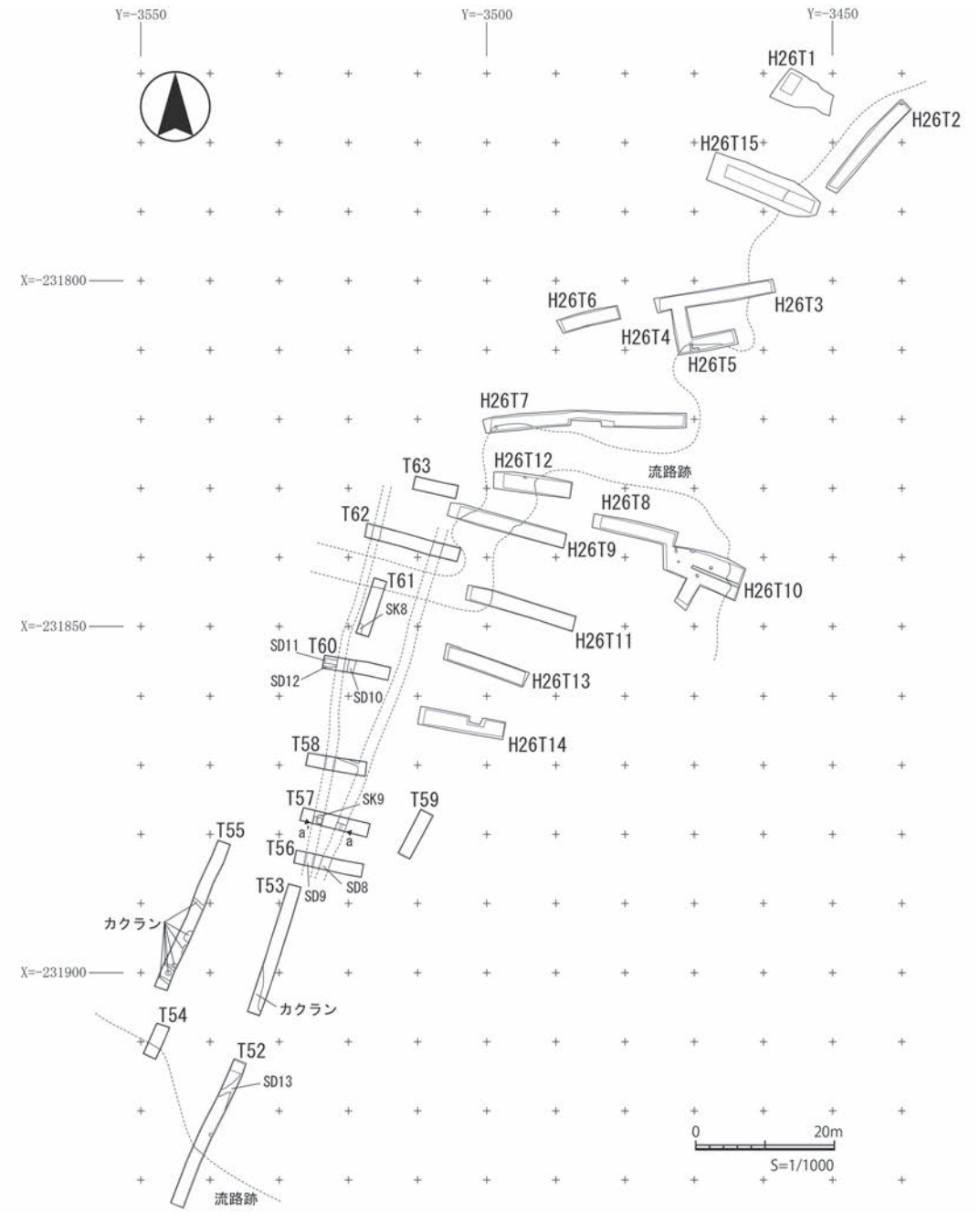



| 層位 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR3/4　暗褐色 | シルト | |
| 2 | 10YR3/2　黒褐色 | 粘土質シルト | |
| 3 | 19YR3/4　暗褐色 | シルト | |

第８図　SD8・SD9 溝跡断面図

【SD9 溝跡】

T56 ～ 58・60・62 で検出した南北方向の溝である。確認総長 50.2 m以上、幅 1.1 ～ 1.5 m、方向




第９図　Ｃ区全体図

はＮ－ 12°－Ｅである。T57 で一部裁ち割り調査を行い、断面は逆台形状を呈し、深さは 0.3 ｍあることを確認した（第８図）。基本層Ⅱ層上面から掘り込まれている。堆積土は暗褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。遺物は堆積土中から陶磁器の細片が１点出土している。

【SD10 溝跡】

T60 で検出した南北方向の溝である。確認総長 1.7 ｍ以上、幅は 0.9 ～ 1.1 ｍである。

【SD11 溝跡】

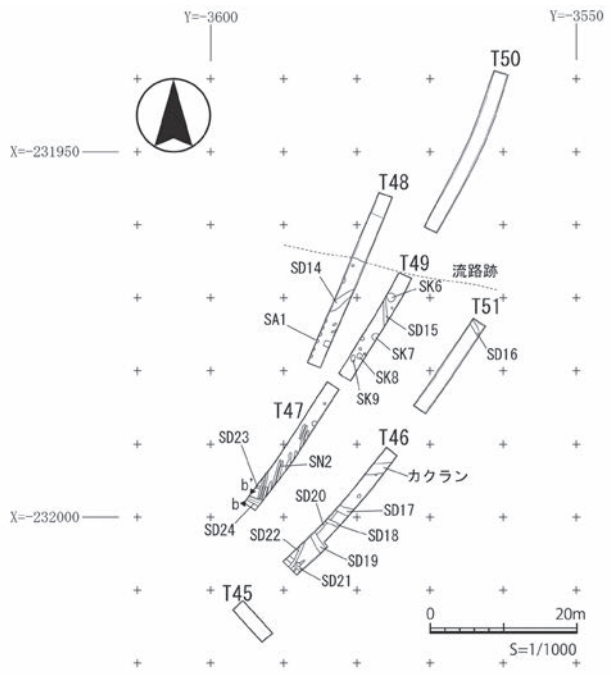
T60 で検出した東西方向の溝である。確認総長 1.9 ｍ以上、幅は 0.4 ｍ以上である。

【SD12 溝跡】

T60 で検出した東西方向の溝である。確認総長 1.9 ｍ以上、幅は 0.4 ～ 0.5 ｍである。

【SD13 溝跡】

T52 で検出した北東から南西へ延びる溝で、途中で南方向へ枝分かれしている。北辺で確認総長 3.7 m以上、幅は 0.6 ～ 1.0 mである。



第10図　D区全体図

D区（第 10 図）

T45 ～ 51 の計 7 箇所の調査区を設定した。柱穴列 1 条、溝跡 11 条、小溝状遺構群 1 群等を検出した。

【SA1 柱穴列】

T48 で東半部のみ検出した南北方向の柱穴列である。 6 基の柱穴から成り、長さ 5.2 m、柱穴の心々間は 0.9 ～ 1.0 mである。方向はN－ 23°－Eである。

【SD14 溝跡】

T48 で検出した東西方向の溝である。確認総長 3.2 m以上、幅 0.7 ～ 1.1 mである。

【SD15 溝跡】

T49 で検出した南北方向の溝である。確認総長 3.1 m以上、幅 0.3 ～ 0.5 mである。

【SD16 溝跡】

T51 で検出した南北方向の溝である。確認総長 2.0 m以上、幅 0.4 ～ 0.6 mである。

【SD17 溝跡】

T46 で検出した東西方向の溝である。確認総長 1.8 m以上、幅 0.8 ～ 1.1 mである。

【SD18 溝跡】

T46 で検出した東西方向の溝である。確認総長 1.8 m以上、幅 0.5 mである。

【SD19 溝跡】

T46 で検出した南北方向の溝である。確認総長 2.6 m以上、幅 0.8 ～ 1.0 mである。

【SD20 溝跡】

T46 で検出した南北方向の溝である。重複する SD17･18･19 より古い。確認総長 4.2 m以上、幅 0.2 m以上である。

【SD21 溝跡】

T46 で検出した南北方向の溝である。重複する SD22 より新しい。確認総長 3.6 m以上、幅 0.3 ～ 0.4 mである。

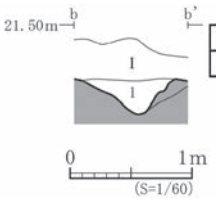
【SD22 溝跡】

T46 で検出した東西方向の溝である。重複する SD21 より古い。確認総長 2.5 m以上、幅 0.5 ～ 0.7

ｍである。

【SD23 溝跡】

T47 で検出した東西方向の溝である。重複する SN2 より古い。確認総長 1.6 ｍ以上、幅 0.3 ～ 0.4 ｍである。




| 層位 | 土色 | 土性 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10YR4/3　にぶい黄褐色 | シルト | 径2～5mmの炭化物粒を微量含む |

第 11 図　SD24 溝跡断面図

【SD24 溝跡】

T47 で検出した東西方向の溝である。重複する SN2 より新しい。確認総長 1.9 ｍ以上、幅 0.7 ～ 1.0 ｍである。この溝に対しては底面まで掘り下げた調査を実施しており、断面はＶ字形で、深さは約 0.3 ｍである（第 11 図）。堆積土はにぶい黄褐色（10YR4/3）シルトである。不明鉄製品が２点出土している。

【SN2 小溝状遺構群（畑跡）】

T47 で検出した南北方向にほぼ並行して延びる小溝状遺構群である。重複する SD23 より新しく、SD24 より古い。溝は 0.2 ～ 0.5 ｍ間隔で 11 条確認した。それぞれの溝の上幅は 0.2 ～ 0.5 ｍ。方向はおよそＮ－ 14°－Ｅである。

| No. | 大別 | 面積 | 遺構 | 遺物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| T1 | A区 | 69.7 | | | |
| T2 | A区 | 19.3 | | | |
| T3 | A区 | 20.1 | | 土師器片2 | |
| T4 | A区 | 16.6 | | | スクモ層あり |
| T5 | A区 | 71.8 | | | |
| T6 | A区 | 79.2 | | | |
| T7 | B区 | 13.4 | | | |
| T8 | B区 | 169.5 | 溝・土坑・ピット・小溝状遺構群・近代水路跡 | 土師器片15 | |
| T9 | B区 | 55.1 | 溝・土坑・近世水路跡 | 土師器片2、陶磁器片52、カスガイ1 | |
| T10 | B区 | 22.1 | | 土師器片3 | |
| T11 | B区 | 36.3 | | | |
| T12 | B区 | 125.8 | 竪穴状遺構・土坑・ピット | 土師器片12、須恵器片3 | |
| T13 | B区 | 33.7 | | | |
| T14 | A区 | 52.0 | | 土師器片1 | |
| T15 | A区 | 15.5 | | | |
| T16 | A区 | 51.0 | | | |
| T17 | A区 | 24.9 | | | |
| T18 | A区 | 44.2 | | | |
| T19 | A区 | 50.6 | | | |
| T20 | A区 | 62.1 | | | |
| T21 | A区 | 13.4 | | | |
| T22 | A区 | 74.0 | | | |
| T23 | A区 | 71.3 | | | |
| T24 | B区 | 64.8 | 溝・ピット | 土師器片2、陶磁器片1 | |
| T25 | B区 | 36.3 | ピット | | |
| T26 | B区 | 67.4 | ピット | | |
| T27 | B区 | 64.1 | 溝・ピット | | |
| T28 | B区 | 60.0 | 溝・ピット | 土師器片5、須恵器片2 | |
| T29 | B区 | 89.6 | 溝・土坑・ピット・近代水路跡 | 土師器片2 | |
| T30 | B区 | 65.3 | 溝・土坑・ピット・近代水路跡 | 須恵器片1 | |
| T31 | B区 | 19.4 | 溝・近代水路跡 | | |
| T32 | B区 | 44.5 | 溝・ピット・近代水路跡・近代炭窯跡 | | |
| T33 | B区 | 35.2 | ピット | | |
| T34 | B区 | 32.4 | | | |
| T35 | B区 | 29.0 | | | |
| T36 | A区 | 49.7 | | | |
| T37 | A区 | 50.1 | | | |
| T38 | A区 | 22.8 | | | |
| T39 | A区 | 26.4 | | | |
| T40 | A区 | 23.6 | | | |
| T41 | A区 | 27.0 | | | |
| T42 | A区 | 55.3 | | | |
| T43 | A区 | 30.3 | | | |
| T44 | A区 | 20.3 | | | |
| T45 | D区 | 11.3 | | | |
| T46 | D区 | 46.2 | 溝・ピット・カクラン | 土師器片8、須恵器片1 | |
| T47 | D区 | 39.5 | 溝・ピット・小溝状遺構群 | 不明鉄製品2 | |
| T48 | D区 | 51.2 | 柱穴列・溝・土坑・ピット | | 沢跡確認 |
| T49 | D区 | 31.7 | 溝・土坑・ピット | | |
| T50 | D区 | 47.1 | | | 沢跡確認 |
| T51 | D区 | 28.7 | 溝 | 土師器片9 | |
| T52 | C区 | 46.0 | 溝・ピット | | 沢跡確認 |
| T53 | C区 | 38.8 | カクラン | | |
| T54 | C区 | 10.1 | | | 沢跡確認 |
| T55 | C区 | 45.2 | カクラン | 鉄釘、ガラス瓶 | |
| T56 | C区 | 19.4 | 溝 | | |
| T57 | C区 | 19.9 | 溝 | 土師器片6、陶磁器片1、鉄釘1、鉄滓1 | |
| T58 | C区 | 17.6 | 溝 | | |
| T59 | C区 | 14.4 | | | |
| T60 | C区 | 18.9 | 溝 | 土師器片1 | |
| T61 | C区 | 16.2 | 土坑 | | 沢跡確認 |
| T62 | C区 | 28.9 | 溝 | | |
| T63 | C区 | 12.4 | | | |
| T64 | A区 | 20.5 | | | |
| 合計 | | 2,669.1 | | | |

表１　確認調査区一覧

# 第６章　まとめ

・ 確認調査では、Ｂ・Ｃ・Ｄ区で遺構を検出したが、Ａ区では検出していない。Ｂ・Ｃ・Ｄ区では、竪穴状遺構１基、溝跡 24 条、柱穴列１条、土坑９基、小溝状遺構群２群、ピット等を検出した。今回の調査では、古墳は発見できなかった。

・ Ｂ区の T12 では SI1 竪穴状遺構などを検出した。遺構確認面で古墳時代後期と考えられる土師器坏・高坏が出土した。

・ Ｂ区の T9 では、南北方向の溝跡（SD1）と土坑（SK1）などを検出した。遺構確認面で 19 世紀代を中心とした陶磁器が出土した。

・ Ｃ区では 50 m以上の長さを有する溝跡２条（SD8・9）などを検出した。

・ Ｄ区では６基のピットから構成される南北方向の柱穴列（SA1）などを検出した。

・ Ｂ区東側やＤ区南側で、遺跡隣接地にも遺構が分布することを確認した。

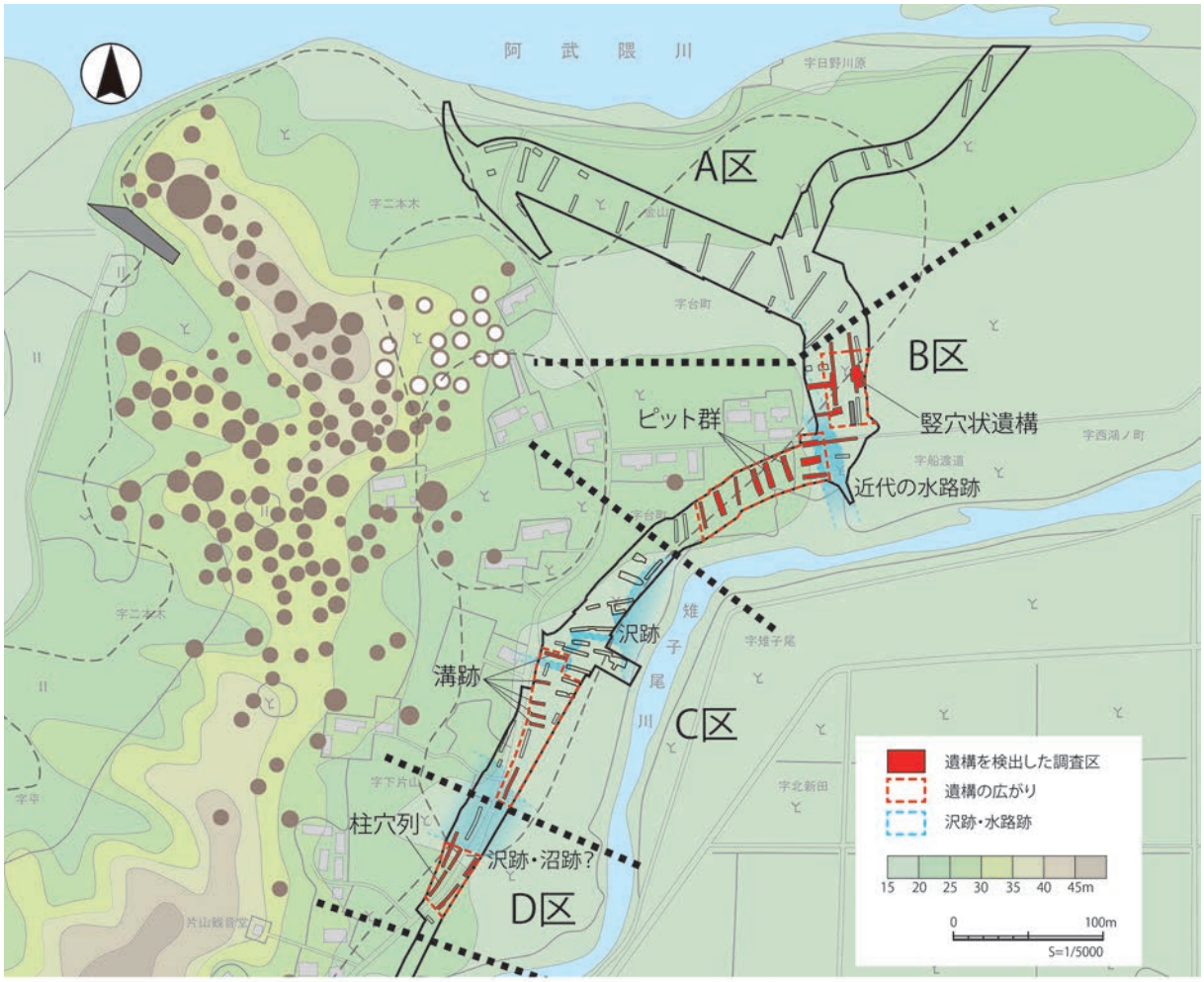



図12　確認調査成果概念図

【引用・参考文献】

志間泰治　1954　「宮城県伊具郡金山町台町古墳群調査概報」『歴史』第 7 輯　東北史学会

志間泰治　1964　「宮城県伊具郡矢ノ目遺跡」『日本考古学年報』12 号

志間泰治　1955　「宮城県伊具郡丸森町金山字台町古墳群調査概報　二輯」（志間 2007 に再録）

志間泰治　1961　「宮城県伊具郡丸森町台町古墳群調査概報　第三輯」『東北考古学』第 2 号

志間泰治　2007　『彙報 1　歴史を掘り起こす』（私家版）

藤沢　敦　2006　『小規模墳の消長に基づく古墳時代政治・社会構造の研究』（平成 15 年度～ 17 年度科学研究費補助金研究成果報告書）

丸森町教育委員会　1999　『大古町遺跡 - 第 1 次・2 次調査概要 - 建設省桜づつみ事業に伴う発掘調査』（丸森町文化財調査報告書第 16 集

丸森町教育委員会　2003　『大古町遺跡-国道 113 号線舘矢間バイパス工事に伴う発掘調査報告書Ⅰ-』（丸森町文化財調査報告書第 17 集）

丸森町教育委員会　2004　『大古町遺跡-国道 113 号線舘矢間バイパス工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ-』（丸森町文化財調査報告書第 18 集）

宮城県教育委員会　1991　「台町古墳群」『舘南囲遺跡ほか』（宮城県文化財調査報告書第 144 集）

村田晃一　2007　「宮城県中部から南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』（平成 15 年度～平成 18 年度科学研究費補助金研究成果報告書　研究代表者：辻秀人）

# 写　真　図　版

1　A区　調査前風景（南東から）

2　B区　調査前風景（東から）

3　C区　調査前風景（北東から）

4　作業風景（B区 T27・西から）

5　A区　T1 全景（東から）

6　A区　T1 北壁土層断面（南から）

7　A区　T2 全景（北西から）

8　A区　T2 北壁土層断面（南西から）

9　A区　T4 全景（東から）

10　A区　T4 西壁土層断面（北東から）

11　B区　T12 全景（南西から）

12　B区　T12 東壁土層断面（西から）

13　B区　T12 遺構確認状況（SI1・南東から）

14　B区　T12 遺構確認状況（北西から）

15　B区　T28 全景（南東から）

16　B区　T28 西壁土層断面（北東から）

17　B区　T24 全景（南東から）

18　B区　T24 西壁土層断面（北東から）

19　C区　T62 全景（北西から）

20　C区　T62 南壁土層断面（北から）

21　C区　T57 全景（西から）

22　C区　T57 北壁土層断面（南から）

23　C区　T57 溝跡 SD8 断面（北から）

24　C区　T59 溝跡 SD9 断面（北から）

25　D区　T48 全景（南から）

26　D区　T48 東壁土層断面（西から）

27　D区　T47 全景（南西から）

28　D区　T47 溝跡 SD24 断面（東から）

図版 4

| No. | 調査区 | | 遺構 | 種類 | 器種 | 特徴 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | B区 | T12 | SI1・確認面 | 土師器 | 高坏 | 坏部内:ミガキ・黒色処理　脚部外:ナデ　脚部内:ナデ | 脚部 | |
| 2 | B区 | T12 | SI1・確認面 | 土師器 | 高坏 | 坏部外:口縁部:ヨコナデ　段以下:ケズリ　内:ミガキ・黒色処理 | 坏体部 | No.1と同一個体 |
| 3 | B区 | T12 | SI1・確認面 | 土師器 | 坏 | 外:口縁部:ヨコナデ　体部:ケズリ　内:ミガキ・黒色処理 | 口～体部 | |
| 4 | B区 | T8 | SK1・確認面 | 磁器 | 碗 | 外:染付・透明釉・松竹梅文　内:染付・透明釉・二重圏線　見込:「寿」のくずし字か　在地　19世紀 | 4/5 | 端反碗 |
| 5 | B区 | T8 | SK1・確認面 | 磁器 | 皿 | 外:染付・透明釉　内:染付・透明釉　底:蛇目高台　近代 | 体～底部 | |
| 6 | B区 | T8 | SK1・確認面 | 磁器 | 小皿 | 外:透明釉　内:型押し・透明釉・草花文　見込:菊花文　在地　19世紀 | 9/10 | 手塩皿 |
| 7 | B区 | T8 | SK1・確認面 | 磁器 | 小碗 | 外:染付・透明釉・隷字体文　内:透明釉・染付　瀬戸・美濃　19世紀 | 1/4 | |

29　出土遺物（S = 1/3）

図版 5

# 報　告　書　抄　録

| | |
|---|---|
| ふりがな | だいまちいせき・だいまちこふんぐん |
| 書名 | 台町遺跡・台町古墳群 |
| 副書名 | 阿武隈川下流右岸金山地区河川改修事業に伴う発掘調査報告書 |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 丸森町文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第22集 |
| 編著者名 | 荒井優作　黒田智章 |
| 編集機関 | 丸森町教育委員会 |
| 所在地 | 〒981-2192　宮城県伊具郡丸森町字鳥屋120　TEL 0224-72-3036 |
| 発行年月日 | 西暦2016年3月31日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード | | 世界測地系 | | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | 北緯 | 東経 | | | |
| 台町遺跡（だいまちいせき） | 宮城県伊具郡丸森町金山字下片山・字台町・字日野川原（みやぎけんいぐぐんまるもりまち かねやまあざしもかたやま あざだいまち あざひのかわら） | 04341 | 10102 | 37度<br>54分<br>46秒 | 140度<br>47分<br>39秒 | 2015. 7. 21<br>～9. 30 | 2,669. 1㎡ | 阿武隈川下流右岸金山地区河川改修事業に伴う確認調査 |
| 台町古墳群（だいまちこふんぐん） | 宮城県伊具郡丸森町字二本木・字平、金山字下片山・字台町（みやぎけんいぐぐんまるもりまち あざにほんぎ あざたいら かねやまあざしもかたやま あざだいまち） | 04341 | 10050 | 37度<br>54分<br>44秒 | 140度<br>47分<br>30秒 | | | |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 台町遺跡 | 散布地 | 古墳<br>近世 | 竪穴状遺構・溝跡・柱穴列・土坑・小溝状遺構群・ピット | 土師器・陶磁器 | 竪穴状遺構の遺構確認面で古墳時代後期の土師器が出土 |
| 台町古墳群 | 古墳 | 古墳 | なし | なし | |


要約

台町遺跡と台町古墳群は、阿武隈川とその支流である雉子尾川に挟まれた、台町丘陵およびその東側に広がる沖積低地上に立地している。国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所による阿武隈川下流右岸金山地区河川改修事業に伴い確認調査を実施した。調査の結果、竪穴状遺構1基、溝跡24条、柱穴列1条、土坑9基、小溝状遺構群2群、ピット等を検出した。竪穴状遺構の検出面では、古墳時代後期の特徴を有する土師器坏・高坏が出土した。また、土坑のうち1基からは19世紀代の陶磁器が出土した。

丸森町文化財調査報告書　第 22 集

# 台町遺跡・台町古墳群

- 阿武隈川下流右岸金山地区河川改修事業に伴う発掘調査報告書 -

平成 28 年 3 月〇日印刷

平成 28 年 3 月 31 日発行

発　行　丸森町教育委員会

宮城県伊具郡丸森町字鳥屋 120

印　刷　会社名